

長田下地域 振興会だより 第32号

2018年(平成30年)7月26日発行

平成30年度長田下地域自治振興会総会

4月22日(日) 13:30～ 真徳寺

当日は、天候にも恵まれ多くの人の参加で開幕。今回は行政や他所からの来賓はなく、会員相互の議論を重視しました。

平成29年度の諸報告を承認の後、30年度の行事や予算、役員人事について議決しました。また、「長田下地域防災会」についても審議・決定をいたしました。

紙面の都合上、詳細は省略しますが、長時間でのさまざまな議事も参加者の協力により無事終了。参加の皆様ご苦勞様でした。これまでの役員さんご苦勞様でした。

これからの役員さん(会長：迫能典、副会長として各区の行政嘱託員をはじめ役員の皆様)この1年ご苦勞をおかけしますが、よろしくお願いいたします。

今年は、「敬老事業」や「生活支援員制度」などの取り組み課題もあり、皆さんの協力が求められる年になりそうです。

(担当T. K)



資源ごみ回収についてのお願い

振興会の皆様には、資源回収にいつもご協力いただきありがとうございます。

回収業者の(株)マルシンから、着色ペットボトルはリサイクルに支障があるため回収できないとの申し出がありましたので間違えて出さないようお願いします。

**着色ペットボトルは
回収できません!**



出典元：PETボトルリサイクル推進協議会資料

平成30年度第1回 ふれあいの集い(ご長寿お祝い) 6月30日(土)

下長田集会所で第1回ふれあいの集いが、32名の参加で行われました。まずは、血圧測定で当日の健康チェックを行いました。中村看護師さん(ひとは福祉会)、ご協力ありがとうございました。

また、ご長寿(80歳以上)の方へお祝いをさせて頂きました。当日ご参加の10名の方には、迫会長より記念品を渡しました。

当自治振興会内には、平成31年3月末現在80歳以上の方は57名おられます。

「かがやき」の高橋施設長から、「住み慣れた地域・自宅での暮らしを続けて頂くように応援しています。」との説明や、健康維持のための「新ころげんたいそう」「自宅で行う体操」を身近なタオルを使用し音楽に合わせて楽しく指導して頂きました。

その後、参加の皆さんはお茶・おやつを頂きながら談笑し、楽しい一日を過ごされました。

参加されなかった「80歳以上」の方々には、その後振興会役員から「友愛訪問」により記念品をお届けいたしました。

今後益々のご健勝をお祈りいたします。

(K. M)



「長田下地域の文化財保護と伝承」について考える②③

今回は、長田下地域に、昔から伝わる獅子舞について考えてみることにしました。

獅子舞は、8世紀ごろ中国から芸能として伝わりました。奈良・平安時代には、五穀豊穰ごこくほうじょう（米、麦、粟、稗、豆類などの豊作）の祈願や、悪魔はらい、家内安全などの祈願として、宮中や寺社で行われていたようです。今日のように、民衆の中に定着したのは、江戸時代と言われています。今では、大切な民俗芸能のひとつでもあります。

長田の獅子舞は、わたしたちの子どもの頃（70年前頃）は、内藤憲明さん宅で、舞初めをして、各区の代表の家、時に新築の家などで舞っていたように思います。

また、神事しんじというものがある、私の記憶では、慧本さん宅を宿にして、各区の代表の人が和服姿の正装で、米や野菜などの山の幸や、昆布などの海の幸を白木の三方さんぱうにのせて、長田神社へ奉納していました。その道中、子どもたちは、大人がかつぐ太鼓を叩きながら神社に参りました。そして、神主のりとそうじょうの祝詞奏上みこしかつの後、神輿担ぎみこしかつや猿田彦さるたひこの舞、獅子舞がありました。

獅子舞の初めに、前座のように舞う、猿田彦の舞について述べてみます。

猿田彦とは、国津神くにつかみ（地の神のこと）ともいい、天から降りた神々を道案内する神といわれています。祭礼の時には、長い薙刀なぎなたを持って、先導役をつとめることが多く、身長が7尺（約2.3m）、赤い顔で、天狗のように鼻が高く、強力ごうりきといわれています。

猿田彦の舞いは、ちょっと、ひょうきんで、高く飛び跳ねるように舞い、舞殿まいどのを縦横無尽に舞い回ります。舞いが一段落すると、口上こうじょうがはじまります。

『ホッ、ホホー それがしは、よろずの神 猿田彦にてそうろう。本日は、長田神社の祭礼にて 悪魔払いに参上つかまつりそうろう。』

『ホッ、ホホー 天に天神、地に地神、海に海神、川に水神。それがしは、地の神にてそうろう。長田神社氏子衆の、隅から隅まで、悪魔はろうてそうろう。』

こうした言葉から、この神様は、何者かが分かり、何をしに来たかが分かります。

『ホッ、ホホー』は、どういう意味か分かりませんが、『やあ』とか『オー』といった挨拶か、叫び声のようにも聞こえます。この口上から分かるように、猿田彦の神は、力の強い地の神で、神事の先導役を務めているようです。



つぎに、獅子舞ですが、形として『一人立ち』と『二人立ち』があります。「一人立ち」とは、映画などでごらんの角兵衛獅子や鹿おどりのように、一人が面をつけて舞うもの。「二人立ち」とは、獅子頭を持つ前足になる人と、もう一人が後ろ足になって舞うものです。つまり、二人がかりで、ひとつの獅子をあやつるもので、長田のものは、もちろん「二人立ち」の獅子舞です。

獅子の舞い方ですが、私たちが小さい時から見てきた動き（所作）は、初めに、開始の太鼓が鳴り、「オーヒーヒャロロ、オーヒャロ」と、笛がゆっくりと獅子を誘い出すように、厳かに鳴り出すと、獅子は初め、前足と後ろ足の人が一直線に進み、太鼓の上で、獅子の口が太く「カチッ」と鳴り、ゆっくりと、右に体をひねりはじめ、続いて、左にひねりを入れます。これを『ひねり』と言います。また、『ひきずり』という舞い方もします。これは獅子頭を床の上に置いて、ひきずって、前に行ったり後ろに下がったりするものです。この舞い方を昔、大人が「ぬたをする」とか「ぬたをうつ」とか言っていたように思います。「ぬた」とは、「湿田とか沼地」のことで、動物が体を冷やす時や寄生虫を取るとき、泥土に体をこする動作をします。その様子を獅子舞に表現したものではないかと思われます。また、柱のある家で舞うときは、『柱まわり』といって、柱を右回りで2～3回まわることもありました。また、『かぶり』といって、参拝者を一人一人、獅子の口で噛んでもらい、魔よけや、家内安全、安産祈願などをしてもらうものです。

また、『抱き込み』といって、子どもや若い女性を後ろ舞の人が、舞い布の中に抱きこむこともありました。『追いかけ』は、今も行われていますが、座敷から屋外に出て、子どもや若い女性を追いかけるものもありました。獅子が、上の歯と下の歯を合わせて、カチカチと鳴らすのを『鳴らし』といっていました。

おだやかな舞いが、ひと区切りすると、「カチカチ、カチカチ」と、太鼓に合わせて激しい『鳴らし』がおこり、それから、舞いはいっそう激しくなります。そのあと、舞い手がひと休みもかねて、「ひきずり」の舞いに入ります。それが終わると、また、もとの「ひねり」の動作にもどって、舞い終わるといようになります。

長田下地域の獅子舞は、幸いにも、明神クラブの皆さんに受け継がれ、つぎに、六風会の皆さんに継承され、とても良い伝統となっています。これは、太鼓や笛の名手である大先輩の吉元光幸さんたちの指導のもと、和太鼓や横笛の演奏、獅子舞の所作を青壮年の人たちが教わり、今では小・中学生も笛や太鼓の技を学び、引き継いでいます。とても頼もしく思います。この獅子舞を、長田下地域の民俗芸能として、末長く伝えていってほしいものです。

ここに載せた写真は、今年の祭礼のものです。獅子頭は、ライオンをまねたものといわれ、昔、長田には雄と雌一対の獅子頭があったそうですが、雄が暴れるので淵に沈め、雌だけが残ったと言われられています。

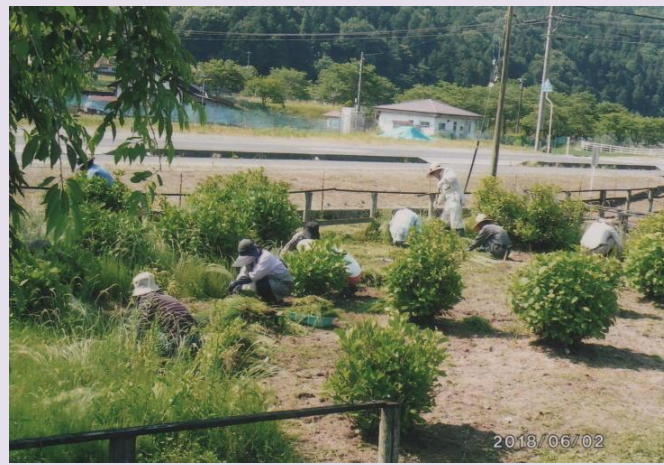


縄文の池整備美化活動

6月2日(土)

6月2日、振興会役員が縄文の池ならびにアジサイ園の整備美化活動に取り組みました。参加者で、池の中の草刈りを行ったり、アジサイ園の中も草刈りやら手入れを行った結果、周辺もきれいになりました。参加された皆さん、お疲れ様でした。

(地域づくり部)



【自主防災情報】

避難時に必要なもの（非常用持ち出し品）の一例です。

- 飲料水
- 食料品（カップめん、缶詰、ビスケット、チョコレートなど）
- 貴重品（預金通帳、印鑑、現金、健康保険証など）
- 救急用品（ばんそうこう、包帯、消毒液など）
- 常備薬
- ヘルメット、防災ずきん
- 雨具
- マスク
- 軍手
- 懐中電灯
- 衣類
- 下着
- 毛布
- タオル
- 携帯ラジオ、予備電池
- 使い捨てカイロ
- ウェットティッシュ
- 洗面用具
- リュックサック



【お詫び】

前号の記事「青少年の声を聞く会」の「こぼと園」太鼓発表には当地区の常川楓真君も参加されていましたが、掲載をし忘れていました。また、「ソバ祭り」では支援して下さった白木町の蕎麦店「ちよろぎ」の増村さんの名前が間違っていました。関係の皆様へお詫び申し上げます。

(広報委員会)

長田下地域人物伝⑱

～広岡 則行さん（7区上）～

今回は7区上の広岡則行さんを紹介합니다。

広岡さんは、定年後、菊づくりを始め、毎年見事な菊を育てています。真徳寺の報恩講の時に、きれいに並んだ菊を見られた方も多いと思います。

広岡さんは、7区上で広岡家の長男として昭和13年2月に生まれました。（今年でちょうど80歳です）

満1歳で父親の勤務地であった現（北朝鮮）朝鮮咸鏡北道 城津府 双津町へ行きました。そこは、日本人だけの町があり、その中には病院・学校・デパートなどもあって、電気も使えたそうです。会社の社宅に住み、寒い冬も会社からスチームが送られ暖かかったそうです。

ただ、終戦後の引き揚げ時は口では言えないぐらい厳しいものだったそうです。1回目の汽車での引き揚げは失敗し引き戻され、2回目は小さな漁船で50人がぎゅうぎゅう詰め、食料もなく台風が来たときはもうだめかと思ったそうです。

昭和21年10月になんとか着の身着のまま母親と弟（2歳）の3人で引き揚げてきました。引き揚げ後、向原小学校へ編入しましたが、教科書もなく母親が近所の同級生の教科書を書き写し、それを持って通学していました。とても情けなかったそうです。

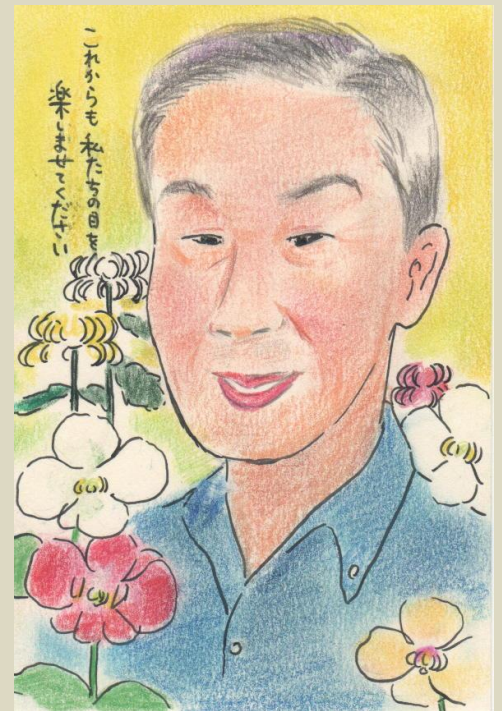
22歳の時には県の農業実習生募集に応募して各地の仲間と共に米国（カルフォルニア）に行きました。（初めて飛行機に乗る）広大な穀倉地帯と当時の日本との生活のレベルの違いに驚いたそうです。1ドルが360～365円の時代です。

この時、米国で3年間寝食を共にした仲間の一人が、平成30年5月5日のテレビ番組「こんなところに日本人」に出演。アルゼンチンでの頑張りや成功に涙が出たそうです。帰国後、マツダに就職し設備保全業務に60歳定年まで勤めました。

定年後、母親が残した菊づくりの資材と資料をもとに菊づくりを始めました。3月の後半から段取りして10月の開花まで約半年間管理する。管理を手抜きすると、半年かけた苦労が水の泡になる。「きれいな美しいものには病害虫が付きやすい」というのが菊づくりの感想だそうです。

私は、この広岡さんの子供時代からのお話を聞いて、こんなすごい体験をしてきたのかと驚きました。いつも物静かで優しい広岡さん、菊づくりだけでなく、地域づくり、これからもよろしくお願ひします。たくさんのお話ありがとうございました。

(Y.H)



広報委員会は、今年も昨年と同じメンバーが担当しています。よろしくお願ひします。
(委員：松田清、谷林文男、寺尾文尚、火上保雄、児玉尊子、金岡俊信、岩見達也)